

門へ達 13  
番 2257  
長 19



繪本烈戰功記後篇卷之七

目錄

武田信玄智謀之事

信玄北条之陣宮見積圖

北条氏安逝去之事

上投謙信祈願之事

小宰相氏政燭圖

北条氏政降泰之事

延曆寺燒失之事

烈戰功記後篇卷之七

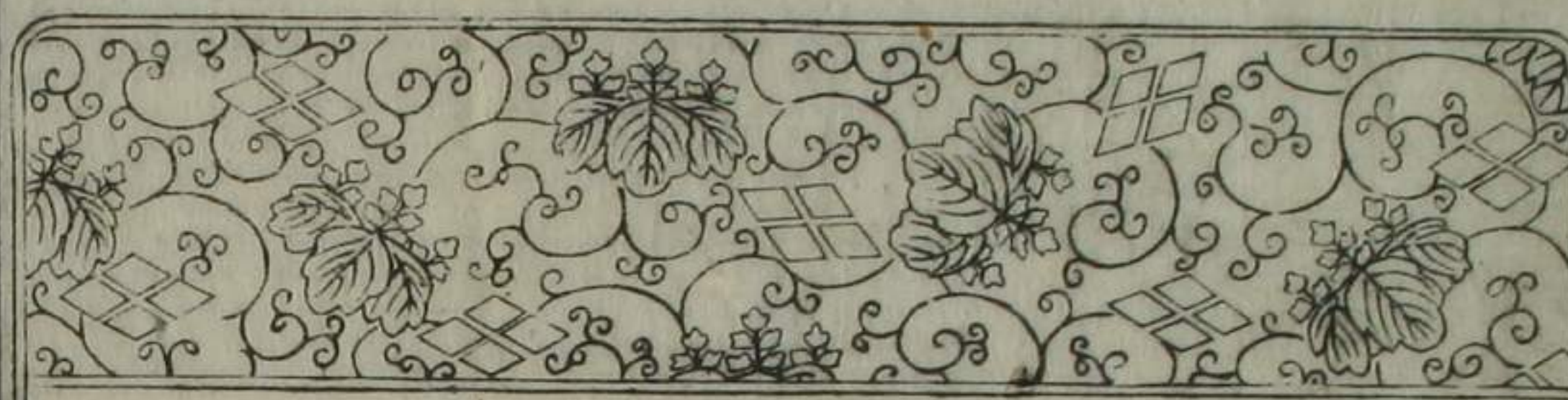


繪本烈戦功記後編卷之七



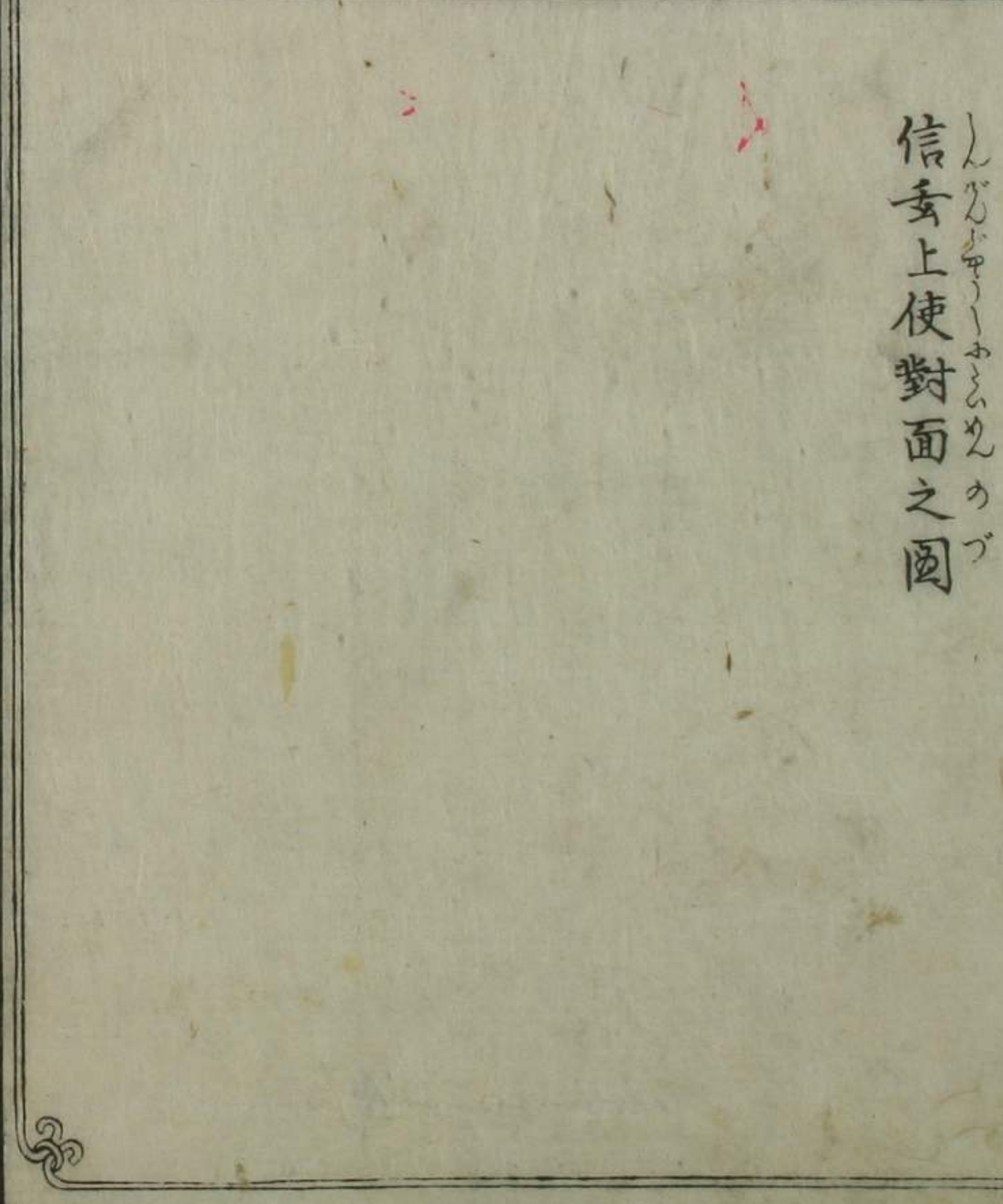
武田信玄智謀之事

Main body of handwritten Japanese text in kuzushiji style, including names like 武田晴信 and 小幡土屋, and dates like 永禄十三年秋九月.



自足利家被送使者於甲越事

信玄上使對面之圖



實一雁過運送、  
 ありとて。佐云志は、敵とらん移りてぞ居る。尚中  
 ありとて。小条方より兼て一方の樹林より二百騎の遣兵と埋伏  
 せさせて。外候の勇士と討ちんと謀らば。千途  
 不返して。佐云自統の勢を引く。出来り。言ふ所のありて  
 馳居ること。天の与るありとて。伏勢踊躍して。一高  
 岡と敷地。佐云目掛けて。来る事とつるより。武田の  
 近后。大は後とり共。赤練棒の勇士共るれば。些も強  
 ど。敵の伏勢をせん。一人も強さば討たれ。せん。ど  
 二手に引られて。防ぐんとす。佐云大に制して。諸軍強  
 こころ。敵よこそよれ。法性院佐云。外候ふ。伏勢

今に退べしと。赤練棒と。あがけて。赤振をけねば  
 予は此方。各方の勢。一々の軍勢。忽然して。われ  
 競ひ来る。敵勢の接合と付く。二百余の歩卒。穂先  
 と拵て。突て。あらし。敵をひも。け。福は。見。い。う。は  
 故も亦伏勢有半と。後。尾。後。の。小。騎  
 たる武者一騎。鞭と揚て。鬼。末。山。録。三。言。去。信。田。京。見。小  
 車と。大。考。ま。呼。び。自。陰。を。ひ。て。を。あ。が。敵。勢。を。す。ま  
 ありと。作。法。一。も。及。び。を。右。性。左。性。乳。を。ま  
 我。先。と。逃。行。と。山。録。を。追。接。は。て。敵。十。四。入。騎。と。付。れ  
 て。然。こ。ころ。は。再。の。谷。間。入。て。彼。勢。の。小。兵。と

川茂カ記二

三

す。ゆめ。大お信玄の左雨の言をきと。致云固くを怒り  
 信玄是と見布。亮尔してると立ちられ。山嶽が名をき  
 と人怖とて逃行程の者共。信玄と付とんと驚り  
 とも亦母とてさ巻。勅うり。云これれ。了場内を  
 始諸軍一周。大おの奇計。又昔と表て。畏服。信玄  
 守て云これ。熟氏政。軍改と。積。四万余  
 一万余の遣兵。あ。高る。一戦。跳。明  
 再小田系。又乱入と。と有け。了場。守。信房。承  
 わ。信玄の。近。鞍。畏。友。戦。地。理。の  
 若。う。と。信。果。と。あ。め。と。り。人。ども。け。場。示。山。又。山

に。り。後。各。も。亦。多。く。い。の。地。形。の。利。害。未。委。と。知。ら。れ。ん  
 然。と。急。に。我。と。挑。め。り。ん。こ。と。如。ゆ。え。い。ん。と。云。け。ま。を  
 信。玄。亦。熟。考。す。了。場。に。信。房。を。易。く。守。ら。せ。し。兼。而  
 信。玄。が。あ。眼。の。め。者。と。お。え。と。進。し。戦。う。れ。ば。懸。て。ゆ。り。来。て  
 地。理。の。換。置。合。戦。の。後。急。明。向。に。告。げ。ら。れ。る。と。云。え。れ  
 け。る。あ。ど。了。場。内。及。以。下。の。常。呂。等。を。み。て。右。の。あ。眼。の  
 如。者。ハ。准。え。平。有。と。懐。く。の。あ。又。遙。に。敵。の。陣。營。と。く。織  
 細。白。傍。若。若。人。は。案。也。り。く。作。ら。ず。あ。る。或。者。二。橋。飛  
 が。ぶ。く。に。馳。来。る。と。諸。軍。睜。と。定。て。是。と。り。た。れ。ば。別。後  
 去。の。を。信。信。系。田。丸。を。清。射。と。芳。根。内。通。か。の。あ。ん。也  
 懸。彼。言。も。あ。ま。り。と。案。放。ら。れ。る。と。く。教。て。云。葉。成

信玄  
北条の  
陣管の  
見積る  
図



北条の陣管

四



其の日本に於て。四大邦の随一と稱せられたる。おれ山田原の城を  
 小糸左京女史氏安。秋の初よりして遠例をておれ。九月  
 の下旬及び。病若きりけり。依て嫡子氏政を嫡。庶子門  
 紫。大よんを弟。良醫をり。め。又の徳寺。徳山。又の徳寺  
 又の徳寺。其。甲斐。永禄十三年十月十二日。年  
 六十。去。天正十年。官領憲政を。追討。より。以来。其  
 威勢。突。八。震。武略。物。始。人。は。後。けり。玉家  
 と。永。之。保。公。宗。と。せ。き。けり。復。切。の。除。けり。自。身。又。陰  
 と。合。ち。力。お。し。と。慶。う。故。又。父。又。父。の。底。鞆。を。り  
 殊。又。氏。安。半。首。と。嫡。ひ。て。男。ひ。ら。れ。ざ。り。ゆ。は。頼。又。ち。力。底

大小二ヶ所。依。小田原。武士。是。と。慶。長。維。あ。て。頼。光。の  
 病。と。氏。安。病。と。稱。し。け。り。初。る。猛。常。の。は。り。る。名。大。お。お  
 せ。ども。毎。老。の。迅。風。い。さ。へ。く。遂。又。黄。泉。の。客。と。あ。り  
 れ。い。づ。ぶ。お。息。及。一。門。母。靡。の。后。或。い。麓。中。の。女。房。達  
 に。い。る。ま。で。晴。夜。又。燈。を。失。へ。る。が。如。く。其。然。傷。は。な。ら  
 ず。同。十。又。日。葬。礼。の。儀。式。執。行。せ。れ。法。号。と。大。聖。院  
 殿。東。陽。大。居士。と。を。云。け。る。茲。又。お。お。息。氏。政。執。事。思。惟。互  
 々。を。換。へ。方。今。武。田。家。と。雌。雄。と。争。の。辨。は。て。先。考。逝。去。有  
 志。氏。政。實。は。後。悔。の。釈。の。稱。と。統。け。ら。如。く。頼。光。信。玄。が  
 智。常。高。子。の。よ。ふ。如。て。教。友。の。合。戦。も。予。後。と。さ。り。け。り。と  
 け。り。は。ま。と。今。喪。又。陰。味。方。機。を。撓。る。の。折。柄。武。田

康

康

康

大

烈陣功譜一編卷之十

武田家記二篇卷之十

系内



勢乱入為。され又南らんふ。経を疎と遮るふ。一巻に彼を。ひは。先和儀を。密に又進位を。甲府小送り。佐云が。改る。小宰おと。女房の。今の大徳。ちりたるに。氏政。福回寺。結形。けま。武田家。及を。衣妻。路と。又南。議

は序よこそ少条家と推。南冬より。入。落着。里尼の。ある。の。向。に。然。彼。且武。議

列傳正言二卷第七



三良系虎と小田系へ若きこれ々々日を経て越後あて  
 攻めをける。然し頃小条氏政内武田家に降と之和  
 儀備しにあり。伝云後小あやぶまなく。末夫小いしを  
 連上洛とて。手准儀頼りあり。越後玉へ  
 吹れぬ。後伝大い。折予上洛と遂。天下を平治と  
 欲り地幸仕願をさる。伝云又先と越さる。世小左の  
 甲斐は。それごとく今急進と強んとして。自りか  
 有。ぬれせん。と。數回を。若め。匡が。今人力に及ぶる。と  
 神仏小新らん。より。術は。とて。又。伝。作。ぬ。示。の。毘沙門。事。へ  
 系。爲。一。七。日。が。所。断。食。あり。手。新。所。小。田。謙。信。不。肖。也。と  
 共。在。世。の中。帝。於。小。新。ら。急。徒。を。平。け。小。家の。擾。乱

市川源頼入と中送。氏政の悦大。極。早。逢。合  
 先中条助。甲。及。於。内。まで。若。越。を。和。睦。の。終。附。と  
 傳。れ。次。又。上。方。市。出。る。の。御。人。氏。政。も。市。供。仕。一。方。の。市。役。を  
 承。け。り。い。ん。と。云。入。られ。る。と。伝。云。も。傳。足。あり。支。お。え。の  
 如。く。あ。ら。く。ぞ。き。り。け。る。それ。小。あ。や。ぶ。武。田。方。の。兵。士。内。上。洛  
 の。准。儀。の。事。と。り。ち。り。  
 上。杉。謙。信。祈。願。の。事  
 永。禄。十。三。年。十。月。改。元。あり。て。元。龜。元。年。と。ぞ。り。け。る。付。予  
 小。条。家。より。越。後。必。春。日。山。の。城。上。上。杉。後。伝。へ。急。使。と。ん  
 又。氏。安。十。月。二。日。率。去。小。村。然。傷。あ。る。と。い。は。し。中。入。れ。る。と  
 謙。信。嘆。息。有。り。急。ぎ。悼。惜。の。使。者。を。送。り。ま。し。且。事。以。子  
 之。に。り。き。す。儀

勤 元 誰

死軍功記二卷卷之七

催

神

高

徳人の欲の所、甲斐の伝云う者先達て上方敷向  
 の權頼也とす。仰然く。不肖の志然と憐と伝云が  
 先途を遮。至上洛と叶いざる様あり。若し新然叶  
 ざる。後伝が一命を縮むせんと。肝膽を碎丹精とす  
 て新らまらる。不思議や。七日皮むる。嘆天小言  
 生糸の樹本折る者あり。後伝遠ざち出て  
 きたれば。摩志はけり。播の本乃育つた。甲斐の  
 方へ。たの枝折て。世もふれあへぬ。小本を皆散  
 たり。後伝是とて。我行既成。就せんと。心不然  
 致で拜謝。半とて。下向及び。彼播の事とす。これ  
 けり。又播の紫三枝。偏と及して。零散後伝の肩

にぞ止りける。是不吉の表示ありとて。後伝憫然とて  
 行みられり。細い糸が上洛も遠ざる。あつてとて  
 て。心中又然と合作。快くして。及城を。ををの  
 士と云を。あつて。秘バ。大儀の妙法の。何の障礙もなく  
 伝系。あつて。上。不。豫。の。古。あ。ま。そ。心。あ。死。事  
 されとて。叫合り。とて。然其。謙。伝。何。の。お。新。然。と。込。れ  
 ける。右。武。田。家。早。春。上。の。上。洛。月。然。延。引。を。及。び。る  
 手。故。如。何。と。る。れ。彼。小。田。系。の。小。条。氏。政。内。武。田。家。と  
 和。を。乞。て。折。紙。と。送。り。ま。り。一。門。普。代。の。人。と。小。条。氏  
 出。され。れ。殊。又。小。条。長。徳。入。る。幻。庵。も。今。川。上。徳。久。氏。ま。へ  
 へ。隠。密。よ。ぞ。せ。り。れ。る。長。徳。一。子。新。三。良。徳。守。と。備。系。の





北条氏政

北条氏政

廿三



小宰相  
氏政  
調子  
圖

小宰相

烈單功訓一篇卷之七

卅三

政より引續て。小田原へ歩み及ぬの所左系北の遊去と將の  
 余り。遂小氏政が和議と許さす。軍と出さざるの事あり  
 に。氏政約を交。今後豆の城墨を兵と搦の條。云語及ぬ  
 也。然も宣免の由は及ぬ。一戦と發曲存せと一巻に交  
 とぞ懸られざる。私事伝云小田原北への事合とぞ定する  
 先小山田左衛門尉伝辰が手勢のよき。飛段越中此軍勢も千  
 と合。是万餘人として。小田原北へ攻めんと欲と  
 城外へ仍引出。城を圍ふ。是又山録三言左衛門尉昌泰の  
 八千餘人と率。案内者と連て。小田原の城山へ入り。是  
 次又内後傳程正昌泰六千餘人と引て。足柄又蒐り押寄  
 び。次又三場兵候も佐房へ。旗布の赤と固て使へ。次示

馬軍

土原右衛門尉伝親。新庄又陣を立。後と押して守る。又小田  
 原の武足勢。大碓。泰孫の筋より推束ふ。道遠新入及  
 と一條右衛門をまがもど一ツありて。戦入べしとありて。軍令も  
 亦嚴お定られて。己又推物とんと為る。是なる

小田原氏政改政系事

平家小田原左衛門をま氏勝。先又伝云より送られ。所の兼文  
 と。大田氏政へ披つる。今。氏政大又怒怖とあり。  
 當て日向後十段。長尾後左衛門の友人と使者して。弟小田  
 右衛門代氏竟と人質と定。甲兵召内。上陣が。今。加後  
 丹後守が方へ披越して。今。般發豆の城へ軍勢を揚  
 加。事。更。氏政が。心。意。より。物。なる。所。あり。武。田。家。小

山内家記

廿四

これ無  
し

恨と合家老共の折為りてい。然とゆへに。全戦と好。市持  
 の憾畢ふ向ふと云うての。且。氏政又於ハ毛政遠愛仕  
 べれり。あひも。申。す。其。為。舍弟氏亮と若向ひ也。市持  
 申。終。る。べ。し。と。申。す。其。為。舍弟氏亮と若向ひ也。市持  
 無。が。申。旋。云。べ。れ。の。事。市。人。質。友。人。と。い。う。越。る。べ。し。と。申。す。小  
 人。政。叔。系。甚。く。恐。れ。被。友。使。子。副。て。小。田。原。へ。上。り。参。り。被。れ  
 け。ま。さ。氏。政。又。保。す。く。承。後。と。舍。弟。安。房。守。氏。邦。と。加  
 右。馬。代。氏。亮。と。友。人。と。人。質。と。し。て。送。り。ま。け。れ。ば。依。云。も  
 心。と。和。ら。げ。蓋。無。事。の。返。答。と。ぞ。云。送。り。ま。け。れ。り。然。し。小。条  
 家。の。老。后。松。田。尾。張。入。り。小。条。左。馬。代。氏。亮。等。氏。政。より。舍。弟  
 友。人。と。人。質。と。し。て。送。り。ま。け。れ。る。と。悔。え。且。其。の。毒。も。也。い

善

友。臣。密。終。而。廢。の。巢。れ。改。廢。ふ。事。り。種。と。和。ひ。け。ま。依。云  
 許。宣。也。然。が。老。后。の。うち。大。事。あり。士。と。二。三。家。持。越。る  
 度。死。方。云。出。され。け。ま。ば。友。臣。大。に。歎。び。氏。政。へ。云。て。清  
 水。と。良。左。馬。代。笠。原。旅。中。守。大。友。全。又。良。は。三。人。の。士。隊  
 將。と。代。して。持。出。され。ば。依。云。刻。先。の。人。質。氏。邦。氏。亮。の  
 友。人。と。引。代。て。小。田。原。へ。送。り。ま。け。れ。り。其。の。時。に。金。和。賂。價。ひ  
 け。れ。ば。依。云。意。果。と。成。り。て。甲。府。へ。送。り。ま。け。れ。り。被  
 小。条。の。人。質。清水。笠。原。大。友。三。士。の。忠。義。を。賞。せ。し。め。て。甲  
 府。古。麓。屋。小。路。又。於。屋。舗。を。き。され。け。り。が。其。年。亦。あ。り。依。云  
 上。方。筋。へ。出。る。の。初。め。に。は。ま。ら。れ。け。り。皆。以。於。る。れ。勵  
 と。して。亦。力。名。と。い。は。れ。り。中。亦。も。清。水。を。良。左。馬。代。の



世又彼のつる大カク。麻の南と引ひける程の常士ありけり。故  
 彩と拵着又志あり。まよひて。拵着を長倉のつとを。是名と云ふ。  
 家又武蔵川越の城に。小倉内務と云ふ。常士あり。元來今川  
 氏共の家は。りしが。氏共後河と没落の後。小倉家に  
 分とよせ。再後君と云て。氏共と還仕せせん。と。天運の  
 綿還と待ありけり。小先月。小倉氏政より使老と云ふ。  
 け。文武旧伝。云。自一戦と催と云きの間。随分拵着と云  
 軍功と勵するべしと云。刻折云盟の状と係とぞ送られ  
 ちり。云。辞曰

今度世二こ。一戦と條。抱身令可被走  
 也候。於。遂。市。云。者。恩。賞。我。功。次。方。不。任。

四  
入

新  
の  
如

336

望候如毎偽八懐大菩薩可有照覧者也  
 仍盟約之状也件

氏政

小倉内務之取

如初を懸られ。依之内務。之。か。於。母。家。の。防。我。の  
 方便。候。し。ち。り。又。氏。政。早。降。と。乞。舍。身。友。人。と。人。信。不  
 出。され。た。る。り。共。中。の。あ。れ。バ。内。務。之。か。信。不。と。信。不  
 方。も。あ。れ。た。る。り。又。人。の。ま。か。る。擔。板。僕。と。頼。り。て。數。年。と  
 送り。し。こ。の。梅。し。と。よ。と。粧。治。市。妻。子。良。堂。等。と。引  
 々。甲。府。へ。来。り。長。坂。丸。金。谷。入。り。約。閑。又。付。て。形。出

新編武蔵野記 石原卷之七

十六

臨 果 長 忠 織 田 信 貞

397

けり。素今川義元の恩顧の者なり。氏共本  
と出奔いこれいふて。本意をく存。小条家を  
の計と也。いひ。氏共氏政を將。二軍と  
作。又。氏共と撫育。其の益量。いふ。能く  
え。氏共。今。隊人と成て。氏共。推。系。仕。あ。て。い。命  
と。肋。結。不。終。い。向。後。身。命。を。控。下。氏。共。と。押。し。入。ん  
と。ぞ。信。貞。い。氏。共。を。い。ひ。け。られ。神。妙。なる。云  
今。より。と。て。別。召。出。され。恩。録。と。与。られ。け。る。小。千。手。云。衆  
小。の。後。上。方。筋。の。合。戦。也。大。別。の。働。と。して。是。又。大  
死。と。ぞ。遂。さ。り。け。る。

延暦寺焼失之事

武田信玄は小条家を制して。春。景。より。飯。沼。五。右。衛。門  
早。速。氏。政。より。使者。と。い。後。馬。二。疋。呈。せ。り。小。千。手。王  
丸。より。い。実。束。紡。百。匹。信。玄。へ。と。為。り。又。尾。花。の  
小。千。手。上。総。介。信。永。より。も。同。名。押。込。介。を。使者。と。て。之。に  
細。帯。二。百。疋。推。子。生。結。二。百。疋。第。二。百。筋。を。上。取。り。て  
押。し。入。り。上。総。介。より。い。使者。と。い。連。く。小。千。手。信。永。の  
縁。由。い。信。永。去。る。永。録。二。年。也。今。川。義。元。と。討。て。勢  
強。大。より。手。後。足。利。氏。服。公。を。供。養。上。洛。と。遂。て。三。好  
が。達。徒。と。平。ら。げ。られ。より。武。威。益。盛。ふ。及。び。猛。勢。旭。の  
上。が。如。れ。れ。ども。唯。天。下。に。怖。者。甲。斐。の。信。玄。也。と。い。られ  
けん。手。降。先。と。降。ん。が。為。事。然。と。は。み。と。結。び。縁。と。組。ぐ

開か

長元

長元

長元

長元

信玄を殺せしむるの如く。仰父の如く。一年に十次宛の侵者を  
ついでに寄物を置て。搦兵と伺ひ。和らざるを定む。其  
隙に上方筋。大畧我の如くせしむ。於て父の寄信も  
殺せしむる。信玄の上洛速らざる。候を待たせしむる。其  
其末段と辟の虚と窺撃との計策ありとぞ。信玄。あるふ  
信永延暦寺の傍徒とある。のりありて。元龜二年秋九月  
に足利四郎元就。大軍とて。叡山とて。四万八千より  
燒立る。是のほど。根本中半とて。山室北一社。鐘樓  
鐘籠とて。燒立り。顯宗秘法の聖教。一因は灰燼とぞ。成る  
于外。碩学完玄の老竹とて。傍徒の如く。猛火の  
裏もぞ。亡び去る。けしむ。甲府も。焼えて。上下に

口織田

信玄を殺せしむるの如く。仰父の如く。一年に十次宛の侵者を  
ついでに寄物を置て。搦兵と伺ひ。和らざるを定む。其  
隙に上方筋。大畧我の如くせしむ。於て父の寄信も  
殺せしむる。信玄の上洛速らざる。候を待たせしむる。其  
其末段と辟の虚と窺撃との計策ありとぞ。信玄。あるふ  
信永延暦寺の傍徒とある。のりありて。元龜二年秋九月  
に足利四郎元就。大軍とて。叡山とて。四万八千より  
燒立る。是のほど。根本中半とて。山室北一社。鐘樓  
鐘籠とて。燒立り。顯宗秘法の聖教。一因は灰燼とぞ。成る  
于外。碩学完玄の老竹とて。傍徒の如く。猛火の  
裏もぞ。亡び去る。けしむ。甲府も。焼えて。上下に  
信玄を殺せしむるの如く。仰父の如く。一年に十次宛の侵者を  
ついでに寄物を置て。搦兵と伺ひ。和らざるを定む。其  
隙に上方筋。大畧我の如くせしむ。於て父の寄信も  
殺せしむる。信玄の上洛速らざる。候を待たせしむる。其  
其末段と辟の虚と窺撃との計策ありとぞ。信玄。あるふ  
信永延暦寺の傍徒とある。のりありて。元龜二年秋九月  
に足利四郎元就。大軍とて。叡山とて。四万八千より  
燒立る。是のほど。根本中半とて。山室北一社。鐘樓  
鐘籠とて。燒立り。顯宗秘法の聖教。一因は灰燼とぞ。成る  
于外。碩学完玄の老竹とて。傍徒の如く。猛火の  
裏もぞ。亡び去る。けしむ。甲府も。焼えて。上下に

忍草上言二篇卷之七

斯かる

織田

三木の将らうく。這様送てよそ小見事。予若の恥辱を  
 ば。身以上格と急。明又上格をかが罪と乳。送候と付成と  
 震襟と安んじ奉らん。膝と拍て云これけきバ。諸臣一同小  
 威服とぞある。嗚呼佐云。小多氏の暴虐と悪んで。臣下に  
 手。殃報と示され。茶云。而返而。小多家も送候不  
 困とて。糧火の裏と亡。うも。災難と送。う。安土の城も。天正  
 十一年。小明智なる。う。か。為小。成。故。不。わ。く。く。ハ  
 神社。弘。閣と。破。却。有。最。以。臨。べ。死。况。我。王。城。結。護。の。雲  
 地と。燒。亡。と。う。不。於。と。車。ラ。ヤ。フ

自足利家被送使者於甲越事  
 于頃京於不於ハ。公方。義。服。公。身。小。多。上。総。介。と。不。和。の。事。出。來。れ。り

織田

之に依

織田

之に依

之有る

依之足利家より。松系。及。友。尼。子。兵。度。願。と。役。者。と。う。と。越。後。公  
 へ。き。い。され。上。松。源。信。へ。我。云。送。と。ま。け。の。様。へ。小。多。上。総。介。佐。米  
 己。が。武。功。と。傲。て。公。儀。と。畏。と。放。逐。の。外。跡。志。法。ふ。る。こ。う。り  
 實。又。本。代。末。受。の。暴。逆。云。浴。不。盡。了。疑。今。是。と。征。せ。ん。り。上  
 救。藻。信。不。下。信。と。誰。う。能。有。依。和。信。く。救。思。臣。の。雨。之。連。赤  
 逆。信。小。多。と。付。成。せ。ら。る。不。於。ハ。本。懐。の。も。公。事。う。是。小。多。と  
 友。使。信。方。と。後。信。即。對。濁。而。曰。小。多。上。総。介。信。暴。逆。殺  
 公。儀。と。成。小。多。不。忠。不。義。の。挙。勅。防。長。以。依。之。刑。戮。送。死  
 の。嚴。命。後。信。僅。而。奉。承。仕。の。不。友。使。よ。り。宣。奏。違。下。其。事  
 と。と。市。清。の。返。状。と。出。され。け。き。友。使。も。承。承。と。悦。び。お。目。急  
 及。系。と。ぞ。及。び。ら。う。が。そ。後。一。月。と。終。て。又。足。利。義。昭。公。より

長



信玄  
上使  
對面の  
圖



實小越必の後任へ。武常天下に事。既小官領職と蒙り  
 武門の面目たるものぞ。彼市清と申上らるへん  
 何れ受末うく言ひのいらん。市本意と違られん。そや  
 時日と申すとすてもうけり。任去も同市清と申上らる  
 り。天。羅髮髮條衣の身と成。今い方々のたてもおたき  
 い程よりいへ。先おと必情と申上りてもお出。更言と酒練  
 仕上と申てこそ市清の中べけ。且又朝廷より大傷心の  
 倫青と申すは。いん。一面小公を修りてこそいん。いん。いん  
 君への大節ある。市武運長久の護摩と修りて。時青  
 執事取入いんとて。松系。九子と種。各各重み。腰刀。獲  
 る等と引よられれば。友使もそ。懇款の情と報謝。修て

織田

之に依

織田

右友人と申。甲府へ下し。武田任去へ云送。まらる。授。授。授  
 身。任去。色部の小士。比て。尚家の威と。信。希都。小の。信。信  
 三姉が一黨と攻亡し。武名と振。い。信。い。我。云。と。放。又  
 為。邦。社。公。閣。と。燒。比。さ。若。不。五。乳。と。為。今。あ。て。い。我。服。と  
 疎。己。武。お。い。と。敢。干。機。己。又。預。然。り。信。武。田  
 任去。上。牧。後。任。と。頼。い。信。の。雨。り。上。牧。後。任。へ。先。進。て  
 市。清。と。云。上。ら。れ。れ。ば。意。後。任。と。心。と。合。武。田。上。牧。友  
 旗。と。い。小。多。と。一。戰。又。亡。し。逆。使。と。信。進。せ。ら。る。と。上。云  
 の。趣。と。信。て。後。任。の。返。状。と。ば。う。出。し。ら。る。信。云。鬼。河。門。堂  
 の。食。の。方。よ。於。友人の。侵。者。よ。對。面。あ。て。任。去。の。云。我。の。答  
 初。重。望。せ。る。と。い。上。牧。と。心。と。合。殊。罰。と。さ。の。條。嚴。旨。畏。い

京都を攻りける。佐云跡とて四臣の事より四ひ。越後佐佐  
武勇勝るる良物なれども。惜哉。智意勝るる今度  
足利家より佐永殊野の上と云と。率尔おれ清と申  
て返状と支使け方へ持来せり。支將する者の一云。七日  
と出立しく。六日十日路も先へ歩ゆらめなれど。よく  
お急と定どりてハ。一云とてお急せざるが守の法也。左  
佐云ハ。い友の上と云の返書ハ。心おてのり也。従彼は新も  
事よりとりたるもの也。今友の支使は。登のり人看とてさみ  
りハ。そ看と合て後。急とてまて拭ひたり。兵穿襲とる  
こと。油路の限こと。等入れける。くして佐云。足利家の  
嚴令と傳られざる。早も尾呂よ支使ければ。上怒お

足利家言二五右老二十七

十一

ち不飲び。又。佐云持た馬の射と使者より。甲府小送り  
金具の鞍籠五口進とせし。物。佐永より。甲府の  
漆と不をみり。佐云先言坂強正と昌佐と召れて  
け事い。何ととあける。昌佐承て曰。佐永佐永君  
の武威又怖。一年に十度の使者と云。若佐と云これ  
けれ。佐永家より。稍来に一友とりの佐使あり  
小多家ハ。ささぐら。佐永希下れ。佐永。然ども。佐永ま  
と所懐りと合るるの意をなく。一向は若と云。致局  
られ。是若の依ハ。皆小多家の。奥意深知あてれ  
又け交際と不をみり。佐永方今日本と云。佐永  
掌握ささぐら。何ぞ漆とて。若佐と云。若と市

日浅力也二篇卷之二

七二

長 長

元 織田

縁者より入魂ぶりと。如く出さるるとして  
 足り。全の諸方より。小多家の暴勢と。所尚家へ吉来  
 るものとあふ。若とまざれば。ぬ換との用心より。見  
 ろう。若小多も手切の号を魚と。彼方へあられざるや。然  
 と。彼方の入魂ぶりと。はうけびて。際と小多うらぐせのこれ  
 て。然る事とない。と云よ。しければ。信雲も然こそあられ  
 と。利甲及際三千杯で。小多家の役者。代々指左殿の射  
 に返されれば。傍らもたはば。既方と射射し。人歩難  
 小多をて。信雲もぞめりけ。 池清  
持 三つアア 織田 有能 長

繪本烈陣功記後編卷之七畢

# 日本百將傳一夕話 全十冊

松亭金水編述 柳川重信畫圖

持と本朝開闢以来 神代のといひ聞く舎て。 神武の皇朝より今小登び  
 彼西土母が挑なると三千年小向をその中間小まきるといふ。とよく義経恒河沙と云く  
 限りもあは人物はち小む威名海内小溢と功と第世小遺をり。え末拳と美ふ。と  
 ちの中由 傑然とる名將の事實を撰り。輯むる處一百員上旨の 神代末に  
 の正史順ひ奉りて勳績を道臣命小訪まり。元龜天に際小至つそ千古獨歩の  
 豊公小畢は。の偏作者が杜撰。輯めらる所。小。そは青林羅。先醒その  
 人物は億兆の中より 擇み出さして百將傳と題せられ各一二代の勳績の概  
 略を漢字の銘せし書ある。人のよく知ら所。小。万代不易の法書なれば  
 今に於いて作らるべき。其文と國字小和らげ。其の神傳補し。其家の  
 観らるせと何れも小冊にて事ゆむるは我 皇國勳績の名將と云ふ



傳を撰りて、惟異聞珍説と掲げ、其の流俗の一日活法をすの被浪華、編撰  
考るる百人一首の一夕活法、その趣を撰りて、終らざるの腹葉、其の幸の浪華の筆を  
余が志小因、意と閑板せんと清く、連筆と採りて、短才因、隨も顔ど、編  
脱、梓小上と、述き小察、市をまんと、能も作と、まなる百お、竹の前の件、小の如、  
神武、まを心の御時、天正の際、至川、年教、九、二十、百條、帝王、百、世、伝、修、を、  
上古、中世、近世と、時代の易、そのま、び、一百員、を、良智の將、その行、ひ、も、一、を、伝、不  
い、十人、小十種、の、元象、の、り、の、る、ま、推、謀、智、若、の、変、化、あり、され、此、書、と、出、右、友、芝、  
好、小、隨、つ、卷、と、閑、け、た、その、時代の、風、俗、及、び、一、治、一、礼、の、い、の、も、更、なり、その、人、れ  
出、自家、系、式、ひ、の、部、の、詩、文、の、佳、化、且、ま、これ、小、連、さ、の、物、活、さ、巨、細、を、裁、く、傳、を  
この、ゆ、え、に、諸、書、と、集、め、て、彼、と、ま、と、心、と、考、さ、ひ、その、人、の、を、傳、と、知、の、何、捷、なり、  
是、小、續、傳、と、加、へ、る、親、く、童、蒙、の、多、小、編、く、漢、を、あ、ん、と、思、ふ、考、の、金、水、を、い、ん、が  
多、年、の、丹、誠、今、ま、で、綴、り、遊、戯、の、書、を、尙、ま、く、聽、か、う、と、い、ふ、こと、なり、

良華書賈 羣玉堂 河内屋茂兵衛梓

# 新編水滸畫傳

全部九十冊出來

近世水滸傳流行、及び草紙錦繪の類、並多し、といへども、博識  
君子の外、兒女童蒙、其原始と知らず、故に曲亭馬琴翁、并高井  
蘭山翁の両先生、才力とりて、唐本百回を翻譯し、國字和解  
て、文中、小篇、飾北斎先生の筆力、を、尽、さ、れ、た、る、圖、画、と、加、兒、女  
童、如、く、り、とも、讀、得、安、く、見、ふ、目、と、歡、む、誦、み、食、と、忘、る、程、乃  
面白、く、り、り、昔、時、宋、の、政、み、も、小、人、姦、邪、朝、と、満、正、人、忠、直、の  
士、ハ、野、外、に、か、れ、有、志、の、者、ハ、擯、行、せ、し、ま、如何、共、可、為、せ、う、と、史  
筆、亦、時、と、諳、て、後、世、と、取、事、多、ま、り、て、羅、貫、中、水、滸、の、豪、傑、と、  
比、て、大、宋、の、嘉、祐、三、年、大、尉、洪、信、と、い、へ、る、者、鎖、魔、碑、と、發、て、り、  
三十六、負、の、天、岡、星、七、十二、座、の、地、煞、星、合、て、百、八、人、の、英、勇、顯、も、種、々、の  
怪、異、奇、事、の、小、説、と、著、述、し、未、曾、有、の、大、部、とい、ふ、も、北、斎、先、生  
の、名、画、曲、亭、高、井、兩、翁、博、識、卓、見、の、才、力、と、り、く、和、解、看、客、更、は、倦、事

あく見ぬ唐土の地理官舎人家官名小至す。卡居巨細小知る故。雅俗の差別を讀得て甚益有り。實は面白無比小説あり。

房州富山奥澤先生著

# 産科發明

全三冊出來

奥澤先生ハ産科小用事信節めて和漢の産學小長。曾而牛馬猿兔の類又至迫悉解体。妊娠の臟腑子宮乃備姿。或ハ人胎の胎元幽冥ある處より婦人の腹状と推て妊娠の否と知る事。十月の間人胎の子宮又成育する事。月々又辨解。諸の難産治療の經驗方。産前産後の心得數条と教ふ。曾而先生産婦と治療有。人々の村里姓名と頭。其療方と委諭。乳汁乳疾の治方。妊婦濟生乃信と專小致され。ゆへは醫家ハ元より素人よりとも一度聞くと妊娠の極意と會得せば子孫相續の基と知る。産科の書多し。此右又出るゆへは古今未發海内無双の新書也。

